



©1998 ANAN-326

郷土の情報を電波にのせて



第41回
熊本県芸術祭参加

ベートーヴェン

第九

第17回



RKK ニュース キャッチャー

県内の最新ニュース・スポーツ
情報と、懐しい熊本の出来事が
蘇るコーナー『あの日あの時』。月
～金、午後5時45分から放送中!

◎キャスター／福島絵美、佐々木慎介、山崎雄樹

週刊山崎くん

郷土・熊本を中心に“旬の話題”
をご紹介します、おなじみの元気な
情報番組で～す。毎週木曜よる
7時、お楽しみに!!

◎出演／大田黒浩一、長船なお美、ほか



身近なニュースを明快な切り口で
コメンテーターが解説する、報道系
情報番組『ビバ!』。毎週土曜
あさ9時30分、ご期待下さい!

◎出演／宮脇利充、野満美子、ほか

平成11年12月19日(日)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催／熊本県民第九の会・熊本県文化協会
助成／熊本県・(財)熊本県立劇場



熊本県知事
福島 謙二

祝 辞

第17回ベートーヴェン「第九」演奏会の開催を心からお喜び申し上げます。

昭和57年から始まったこの演奏会は、熊本の年末を彩る行事として今やすっかり定着しております。「熊本県民第九の会」の林原実行委員長をはじめ、会員の皆様方のこの演奏会にかけける御熱意とそれを毎年現実のものとする実行力に對しまして、まずもって心より敬意を表します。

さて、今年は実に様々なことがございました。39年振りの「くまもと未来国体」や身体障害者のスポーツの祭典「ハートフルくまもと大会」も成功のうちに終えることができました。特に、国体の公開競技スポーツ芸術では数多くの主催、協賛事業を実施し、スポーツと同時に文化の面でも熊本の持つ底力を全国にアピールすることができました。他方、この秋の台風18号は、農作物や建物等へはもちろんのこと、尊い人命まで奪うというこれまでにない被害をもたらしました。

今年1年の様々な出来事を心に刻みつつ、私たちは、また新しい年を迎えようとしています。本日は、皆様方の歓喜の歌声が、会場のみならず全ての県民の方々に感動と希望を与え、今世紀最後となる年を力強く押し開いていくことを期待しております。

最後に、本日の演奏会の御盛會と皆様方の益々の御活躍をお祈りしまして御挨拶といたします。



熊本県立劇場館長
川本 雄三

生きる喜びと勇気を

県民第九の会の第17回公演にお祝いを申し上げます。

私事になりますが、私が一年だけ学んだ旧制五高の気風は概してバンカラでした。芸術趣味などは軟弱だと見なす雰囲気もあったかも知れませんが、そんななかで音楽愛好の生徒たちが「第九」の「合唱」の練習を始めたのです。バンカラ組だった私も、そんな動きを、どこか冷眼視していました。だが発表会の当日、講堂で聴いた「合唱」には感動し、それがクラシック音楽好きの一つのきっかけにもなりました。

年末のこの時期は、全国各地で「第九」の演奏会が相次いで行われます。なかで熊本の「第九」の特色は、三百人もの合唱団を公募による県民の参加で編成していることです。常連も多いようですが、毎年、七十人前後の人たちが入れ替わっていると聞きました。とすると、すでに少なくとも千三百人もの人たちが参加してきた計算になります。

今年の「第九」も、かつて私が得たような感動を客席にもたらすことでしょうか。また、自ら進んで参加し、一体となって「合唱」をうたったという熱い体験は、その人たちの人生の折り節に、必ずや生きる喜びや勇気を与え続けるに違いないと思うのです。



熊本県文化協会会長
三浦 洋一

本格的な歌声を

県民第九の会の第17回公演を心からお慶び申し上げます。

2000年にはドイツで「ドイツにおける日本年」の行事が行われると聞いております。これを記念して今回の公演にはシュパイヤー市からレオ・クレマー氏を指揮者として招聘されることになりました。

国際交流としては勿論のこと、ドイツの指揮者によるベートーヴェン「第九」を聞くことができますのは私共にとってこの上もない喜びであります。同時に熊本交響楽団と第九の会の独唱者の方がた、及び合唱団の皆さんのご期待も大きいものと存じます。

私は20年あまり前にパリを再訪したとき、フランス人の知人が夜のノートルダムに案内してくれました。ちょうど音楽会がおわったところで、照明に浮かびあがった寺院の正面の玄関口から沢山の人たちが談笑しながら出てくる場所でした。

ヨーロッパの教会が芸術文化の拠点としても市民生活のなかに生きつづけていることを知って、ヨーロッパの音楽の根の深さに一驚したことがあります。

レオ・クレマー氏もシュパイヤー市の大寺院「ドーム」の合唱指導者及びオルガニストとして各地で25年にわたる演奏活動を行ってこられました。熊本の地で本格的な第九の歌声が聞ける日を待望し、公演のご盛況を祈念申し上げます。



熊本県民第九の会実行委員長
林原 隆治

ご挨拶

ご来場、誠にありがとうございます。本日にここに第17回目の第九演奏会を開催できますのも皆様のご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。

今回は熊本日独音楽交流協会のご尽力により、ドイツから、ヨーロッパ有数の大聖堂「ドーム」の芸術監督で、ヨーロッパ各地でご活躍中の指揮者、レオ・クレマー氏をお招きし、本場のベートーヴェンをご指導頂くことができました。先生の豊かな音楽性にどれだけ応えられるか分かりませんが、団員一同張り切っております。どうかお楽しみください。

また、今回の企画は、本会の演奏メンバーである熊本交響楽団が近年実現した中国・米国公演の、ドイツへ向けたワンステップでもあります。すぐに実現、とはいかないようですが、夢は大きく、将来の可能性に期待しているところです。

第九合唱公募には毎年300名余の方々が応募され、その中で約2割は第九初体験です。いつも新しい合唱団員を迎えることも、この演奏会が新鮮さを失わない理由ではないかと思えます。

今後とも県民の皆様のご参加とご来場によりまして、第九歓喜の歌が永く熊本の夜空に響きわたりますよう願っております。

本公演に際し、熊本県立劇場ならびに熊本県文化協会より助成頂き、プログラム掲載各社よりご後援頂きましたことを深く御礼申し上げます。

指 揮 レオ・クレーマー

独 唱 ソプラノ 水 野 貴 子
 メゾ・ソプラノ 青 山 智英子
 テノール 持 木 弘
 バリトン 松 本 進

合 唱 熊本県民第九の会合唱団

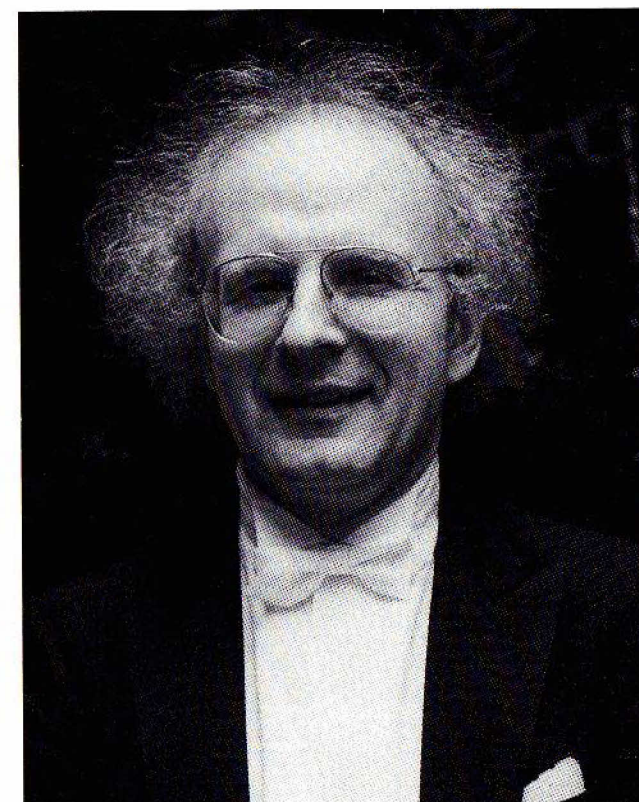
 合唱指揮 松 岡 聡
 工 藤 勇 壹
 林 原 隆 治

 ピアノ 古 閑 恵 美
 真 田 眞 澄
 浜 田 志 貴
 林 原 ゆ り

管 弦 楽 熊 本 交 響 楽 団



平成10年12月20日(日)《第16回熊本県民第九の会演奏会(指揮=井崎正浩)から



指 揮 レオ・クレーマー (Leo Krämer)

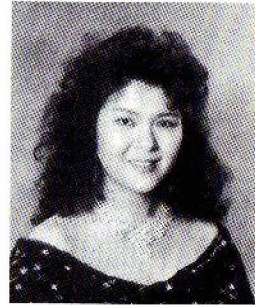
1944年、Puttlingen(Saar)生まれ。
シュパイヤー大聖堂(ドイツ)カペルマイスター兼オルガニスト、ザールブリュッケン国立音楽大学教授。
TrierとSaarbrücken音楽大学で教会音楽を学んだ。1966年にはBrucke(ベルギー)、Belrin(ドイツ)で、1967年にはPfalz(ドイツ)で、1970年にはAosta(イタリア)でそれぞれの国際オルガンコンクール優勝。1971年より現在に至るまで25年以上、ヨーロッパでも指折りのカテドラル“Dom zu Speyer”(シュパイヤーのドーム)で、Dom Kapell Meister(教会音楽総監督)兼Dom Organist(オルガニスト)、また、国際音楽祭(毎年)の総監督に従事。その他、世界各国の国際オルガンコンクールの審査員として招かれる。1992年~1994年には総指揮者としてエストニア・フィルハーモニーを、1995年よりロシアの三大オーケストラの一つミンスクでゲスト指揮者として、また毎年サンクトペーターズブルグ(レニングラード交響楽団)の定期演奏会に指揮者として招待される。現在は同交響楽団のカンマーオーケストラの常任指揮者もつとめる。その他数多くのラジオ、テレビ、CDにて活躍。1975年以来、現在に至るまでハイデルベルグ、マンハイム、ザールブリュッケン国立音楽大学でオルガンクラスを持ち、学生に教会音楽・オルガンを教える。

水野貴子 (みずの たかこ)
ソプラノ



東京芸術大学卒業。東京音楽大学研究科修了。二期会研究生修了時には最優秀賞及び川崎静子賞を受賞。ミラノに留学。ジェノヴァの国際新人声楽家コンクール第一位、パドヴァのクラデッティ国際コンクール第三位、トゥルーズ国際コンクール、ベリーニ国際コンクールに相次いで入選。チャイコフスキー国際コンクールでは五位に入賞。国内でのオペラは「ピバ・ラ・マンマ」のプリマドンナ、「リゴレット」のジルダ、「ドン・ジョバンニ」のドンナ・アンナ、「魔笛」の夜の女王、「ラインの黄金」のヴォークリンデ、「カルメンシータ」のミカエラ、オランダでは「ランメルモールのルチア」のルチア、台湾では「カヴァレリア・ルステイカーナ」のサントウツツァ、「道化師」のネッタを演じた。宗教曲のソリストは、ハンガリーにてヴェルディ「レクイエム」、台湾にて、ベートーヴェン「荘厳ミサ」、ショスタコーヴィッチ「交響曲14番死者の歌」、オランダにて、オルフ作曲「カルミナ・ブラーナ」など。またオランダ、ソルトレークシティでコンサート、ウィーンにて日本歌曲のリサイタルを行うなど海外での活動もめざましい。日本クラウンから「水野貴子オペラ・アリア集」「日本名歌集」「日本名歌第二集」が発売されている。東京音楽大学非常勤講師。二期会会員。

青山智恵子 (あおやま ちえこ)
メゾ・ソプラノ



武蔵野音楽大学卒業。愛知県立芸術大学大学院修了。文化庁オペラ研修所第4期修了。リア・グアリーニ、エレナ・オプラスツォア、菊池洋子、松山憲善、小島琢磨、高橋大海、足田生次郎、の諸氏に師事。1985年、文化庁派遣芸術家在外研修員として、渡伊、ミラノにて研鑽を積む。「カルメンシータ」新人賞第1位受賞。その後、二期会公演『カルメン』のタイトルロールに抜擢され、躍動感溢れる新しい魅惑のカルメン像を表現し、大型新人誕生と賞賛を浴びた。この活躍に対し、第15回ジローオペラ賞新人賞を受賞。翌年より、文化庁移動公演『カルメン』で6年連続全国各地で公演し、舞踊経験を生かした華麗な動きと妖艶な歌唱で聴衆を魅了した。また、他のオペラでは、ヴェルディーの「アイダ」アムネリス、「ドン・カルロ」エボリ、「仮面舞踏会」ウルリカ等、モーツァルトの「フィガロの結婚」ケルビーノ、「コジ・ファン・トゥッテ」ドラベラ、「イドメネオ」女王エレットラ、「ティトの慈悲」セスト、またワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」ブランゲーネ、「神々の黄昏」ヴァルトラウテ等の難役を、その幅広い音域と豊かな音楽性で演唱した。その他、日本オペラ協会主催『すて姫』の主役として、客演するなど次々と主要な役を的確に演じ分け、いずれも高い評価を得ている。また、ソリストとして、多くの主要オーケストラより招かれており、とりわけ、その艶のある美声には、定評がある。二期会会員。日本声楽家協会会員。武蔵野音楽大学講師、東京芸術大学非常勤講師。

持木弘 (もちき ひろし)
テノール



東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。酒井 弘、天野秋雄の両氏に師事。第20回日伊声楽コンクール及び第53回日本音楽コンクール声楽部門入選。埼玉県民オペラ「夕鶴」の与ひょうでオペラデビュー。以来、数多くのオペラに出演している。「カヴァレリア・ルステイカーナ」「ルチア」「椿姫」「蝶々夫人」「リゴレット」「マクベス」「ドン・カルロ」「ドン・ジョバンニ」「道化師」「オテッロ」「ジャンニ・スキッキ」「フィガロの結婚」「魔笛」「コジ・ファン・トゥッテ」「後宮からの逃走」「こうもり」「ペトロ岐部」「滝廉太郎」「秩父晚鐘」「よさこい節」「御柱」「ルクセンブルク伯爵」「ほほえみの国」等。又リサイタルや「第九」などのコンサートにも数多く出演している。第18回ジロー・オペラ賞受賞。藤原歌劇団団員。埼玉オペラ協会会長。

松本進 (まつもと すずむ)
バリトン



国立音楽大学声楽科卒業。同大学院オペラ科修了。野崎靖智・平野忠彦・中山梯一の各師に師事。1981年、二期会オペラ「ニュルンベルグのマイスターシーナ」のハンスザックス役に急遽代役として出演し、彗星のごとくデビュー。この長大な作品に対し、新人とは思えぬ堂々とした舞台を務め一躍注目を集めた。この業績によって、第9回「ウイナワルドオペラ賞(ジローオペラ賞)」を受賞。1982年より、文化庁在外研修員として、2年間ウィーンに留学。リリー・カラー女史に師事。1983年一時帰国し、日生劇場20周年記念公演で「魔笛」の弁者を歌う。1984年に帰国した後は、「魔笛」のパバゲーノ「ジャンニ・スキッキ」のタイトルロールを始め、「フィガロの結婚」「コジ・ファン・トゥッテ」「セヴィリアの理髪師」「愛の妙薬」「椿姫」「アルジェのイタリア人」「蝶々夫人」「リゴレット」「ファルスタッフ」「タンホイザー」等に加え、「人買い太郎衛」「黄金の国」「ちやんちき」「金閣寺」「モモ」といった邦人オペラにも多数出演中いずれも好評を博し、舞台にはなくてはならない存在になっている。また、コンサートにおいても「第9」を始め「カルミナ・ブラーナ」「メサイア」「エリア」「天地創造」「戦争レクイエム」等のソリストとして幅広く活躍している。1999年6月の「罪と罰」・4月と8月【エジンバラ国際フェスティバル】「トウランドット」では絶賛された。二期会会員・国立音楽大学・昭和音楽大学・東京学芸大学・各講師。

1. 「エグモント」序曲 ヘ短調 作品84

ベートーヴェン

2. 交響曲第9番 二短調 作品125「合唱付き」

ベートーヴェン

第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章 Molto vivace

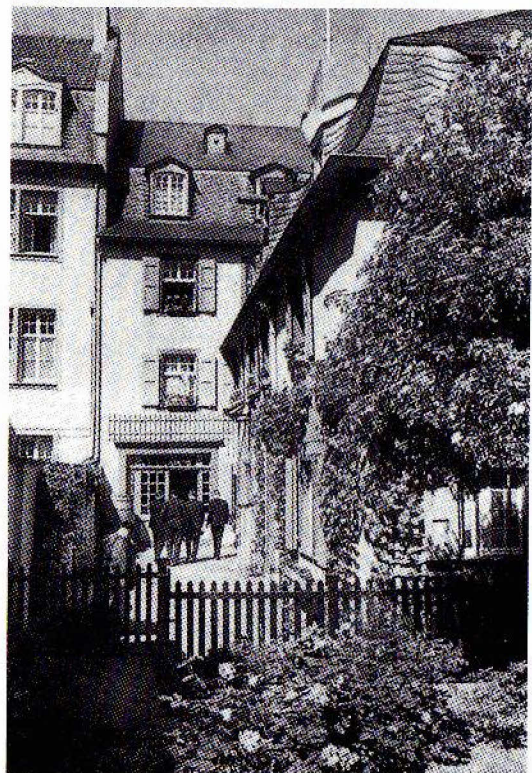
第3楽章 Adagio molto e cantabile

第4楽章 FINALE

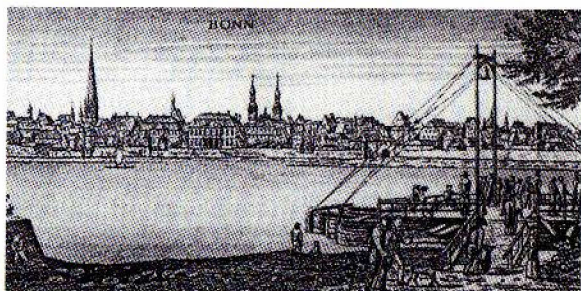
ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の記念演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向かってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子は、実に壮観で感動的であったに違いない、と同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持ちと愛する気持ちが手にとるようにわかる。



ベートーヴェンの生家(ボン)



ライン河の埠場から眺める対岸のボンの市全景 1800年頃

■ シラー 《歡喜に寄す》

対訳=大宮 真琴

O Freunde, nicht diese Töne ! sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

バリトン独唱

おお、友よ、この調ではなく、
さらに快い、さらに喜びに満ちた調べを
ともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum !
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt ;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

バリトン独唱・合唱

① 歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
② この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein !
Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund !
Urd wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund !

四重奏・合唱

③ 大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情をかち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
④ しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかつた物は、
涙しつつ、足音をしのぼせ、立ち去るがよい！

Freude trikken alle Wesen
An den Brüsten der Natur ;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod ;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht' vor Gott.

四重奏・合唱

⑤ すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
喜びの薔薇の小径を行く。
⑥ 歓びは、われらに、□づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルビムは、神の御前立つ。

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plab,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

テノール独唱・男声合唱

⑦ 歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
⑧ 同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

Seid umschlungen, Millionen !
Diesen Kuss der ganzen Welt !
Brüder ! über'm sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder. Millionen ?
Ahnest du den Schöpfer, Welt ?
Such' ihn über'm sternenzelt !
Über Sternen muss er wohnen.

合唱

⑨ たがいに手を取り合おう、億万の人々よ！
この□づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のあなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
⑩ ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。
星空のあなたに、王をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1.「エグモント」序曲 ヘ短調 作品84 ベートーヴェン

ナポレオンの皇帝即位に失望したベートーヴェン(Ludwig van Beethoven 1770-1827)にとって、ゲーテの戯曲「エグモント」に登場する英雄エグモントは大なる魅力であった。宮廷劇場支配人ハールトルの依頼によってこの戯曲の付帯音楽である「エグモントへの音楽」が作曲された1809年から1810年にかけては、皇帝ピアノ協奏曲や告別ソナタなどの名作が生みだされている。ベートーヴェンにとってこの時期はロマン主義的な傾向が強まり、それはこの「エグモント」にもよく表れている。

ゲーテはこの史実をもとにして悲劇を書いた。物語は16世紀、スペインの圧政下のオランダが背景となっている。フランデルの領主エグモント伯爵はスペインの圧政から祖国を救おうと独立運動の指導者として登場する。しかし彼は捕らえられ死刑を宣告される。愛人クレールヒェンはエグモントを救おうとするが果たせず毒を仰いで自殺する。断頭台に向かうエグモントの前にクレールヒェンの幻影が現れ彼を祝福する、というのが大筋である。ベートーヴェンはこの戯曲のために「序曲」や「幕間の音楽」「勝利の交響曲」など10曲の音楽を作曲した。

ベートーヴェンは「私はもうただゲーテに対する愛からのみでエグモントを作曲しました」と或る手紙に記すほどゲーテを深く敬愛していた。この歴史上の巨匠の会見は1812年に一度実現した。しかし、ゲーテはベートーヴェンの芸術を異質のものとしてついに受け入れるまでには至らなかった。

「エグモント」序曲は導入部とソナタ形式による主部からなる。先ず序奏部では弦楽器群が重々しくしかも決然とした動機を提示する。これを木管がやさしく受ける。これが繰り返されたあと、ppで弧線を描くような新しい動機が提示される。

主部に入りこの動機の中からチェロに主要主題が姿を現す。これは雄大で悲壮なエグモントの性格がにじみでているようである。副主題はffの管弦楽で開始され、木管がやさしく受けるもので、序奏の部分から生まれたものである。

展開部は木管楽器群が主として主要主題を断片的に変形させるものであまり長いものではない。規則どおりに再現部が現れたあと、終結部は前の気分はがらりと変わり、第1ヴァイオリンが誘導動機をppで呈示する。これが次第にふくれあがり、新しい勝利の主題ともいふべき勇壮な主題が全奏のffで出現する。そして雄大なクライマックスへと導かれる。

2. 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に九番目の交響曲に書手した。

1793年、ポンのフィッシュェニヒは、シラー婦人の手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう…」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりして合奏付きの交響曲構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいできて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大なる精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終わりには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度(第三音がない)響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃(ほうはい)として沸き起こる巨大な魂のごとく蕭然(しょうぜん)たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異なって、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気持うをもち、ときどき第1主題の部分を見えながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題へ壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二楽章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考える限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓びの調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワグナーは「激しい喜びが、この第二楽章をはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻酔へと駆りたてられるからである…」と語っている。

【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

賛歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するような明るく美しい第二主題は、この両主題にもと

づく由由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中で一つの頂点であり、ワグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱(ゆううつ)な感覚へと溶けさせていくことか、思い出がとくに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのよう」に思われる…」と語っている。

【第四楽章】 Finale

第1呈示部=まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現れる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながら全合奏に至る。

第2呈示部=この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめる。ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわなる。

再現部=やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組み合わせられて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中のひとつのクライマックスを形づくる。

コーダ=曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「熊本県民第九の会」実行委員会

顧問	有馬 俊一	委員	神田 一伸	藤本 幸弘
	下田 宰城		草刈 秀克	松岡 聡
委員長	林原 隆治		草刈 秀士	本山 洋
			田北 洋康	山崎 崇伸
			黒葛原 潔	

〈コンサートマスター〉 鶴 和美

〈1stヴァイオリン〉

岩橋 和江
内田 衣伊子
桂 敦子
上河 幸彦
古泉 晃子
高松 江三子
龍野 珠美
続 宏子
黒葛原 契子
鶴 和美
長坂 浩子
中山 文子
織川 明子
原 雅子
松岡 千平
山口 みゆき

〈2ndヴァイオリン〉

荒瀬 麻里
岡 純子
置田 みどり
北山 尚子
清田 みずほ
小柳 敦子
迫田 美和
佐藤 弘美
汐月 哲夫
園村 明美
高木 信雄
中尾 麻美子
東 真知子
増見 達生
村田 裕子
本山 洋
柚原 三弥子

〈ヴィオラ〉

熱田 聡
安倍 和歌葉
池辺 京子
緒方 進
緒方 肇
北澤 孝治
清元 晃
甲田 啓子
黒葛原 潔
土井 智広
徳永 義治
水田 剛
山崎 崇伸
吉田 孝雄
吉田 美智子

〈チェロ〉

石垣 博志
佐無田 護
長尾 和治
永倉 照恵
長坂 輝喜
野島 秀司
佛淵 かつよ
佛淵 信夫
本田 義信
三浦 純子
水原 真純
山中 朗史

〈コントラバス〉

古泉 俊彦
国米 稔
白木 信一郎
田上 博子

歳田 和彦
中島 まゆみ

〈フルート〉

相澤 久美子
今村 ナオミ
山口 邦子

〈オーボエ〉

荒田 優子
石田 栄理子
釘沢 秀雄
辰野 裕昭
橋本 寿一

〈クラリネット〉

緒方 裕子
高野 栄次
田中文子
前野 美千代

〈ファゴット〉

小田 穂積
高木 群之
田村 聡司
中村 友香
星出 和裕

〈ホルン〉

奥羽 朋子
斎藤 恵之
栃原 みわ
安松 真司
渡辺 由美

〈トランペット〉

市原 彰
堀江 幸司
山下 明朗

〈トロンボーン〉

川渡 広樹
小多 崇
福島 聡

〈打楽器〉

白尾 友宏
唯野 佳香
田中 里香
山中 美雪

- 第1回 昭和57年12月28日(火)
指揮 山田 一雄
独唱 新 圭子 木村 宏子 伊豆野 修 高橋 修一
※越天楽(雅楽)……………近衛秀麿(編曲)
- 第2回 昭和58年12月11日(日)
指揮 大友 直人
独唱 高見久美子 岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介
※楽劇「ニルンベルグのマイスターシンガー」前奏曲……………ワーグナー
- 第3回 昭和59年12月27日(木)
指揮 山岡 重信
独唱 中沢 桂 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹
※弦楽のためのアダージョ 作品11……………バーバー
- 第4回 昭和60年12月25日(木)
指揮 フランティシェック・ワイナール
独唱 三縄みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男
※序曲「レオノーレ」第3番 八長調 作品72a……………ベートーヴェン
- 第5回 昭和61年12月27日(火)
指揮 荒谷 俊治
独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 康夫
※トッカータとフーガ 二短調……………バッハ〜ストコフスキー
- 第6回 昭和62年12月26日(土)
指揮 安永 武一郎
独唱 中沢 桂 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信
※「エグモント」序曲 八短調 作品84……………ベートーヴェン
- 第7回 昭和63年12月25日(日)
指揮 安永武一郎
独唱 三縄みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦
※序曲「コリオラン」八短調 作品62……………ベートーヴェン
- 第8回 平成元年 12月24日(日)
指揮 小松 一彦
独唱 秋山恵美子 木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三
※「プロメテウスの創造物」序曲 作品43……………ベートーヴェン
- 第9回 平成2年12月23日(日)
指揮 籾山 和明
独唱 山田 綾子 木村 宏子 大野 徹也 福島 明也
※「ロオザムンデ」序曲 作品26……………シューベルト
- 第10回 平成3年12月23日(日)
指揮 安永武一郎
独唱 西村 出美 木村 宏子 田中 誠 宮原 昭吾
※「エグモント」序曲 八短調 作品84……………ベートーヴェン
- 第11回 平成5年12月23日(木)
指揮 荒谷 俊治
独唱 河添 富士子 春日 成子 小林 彰英 栗林 義信
※楽劇「ニルンベルグのマイスターシンガー」前奏曲……………ワーグナー
- 第12回 平成6年12月24日(日)
指揮 金 洪才
独唱 岩永 圭子 妻鳥 純子 響庭 知昭 勝部 太
※「エグモント」序曲 八短調 作品84……………ベートーヴェン
- 第13回 平成7年12月24日(日)
指揮 金 洪才
独唱 西森 由美 妻鳥 純子 大島 博 大島 幾雄
※モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」k.618……………モーツァルト
- 第14回 平成8年12月23日(月)
指揮 本名 徹二
独唱 河添富士子 妻鳥 純子 大間知 博 大島 幾雄
※カンタータ大147番より「コラール」主世、人の望みの喜びよ”BWV147…J.S.バッハ
- 第15回 平成9年12月21日(日)
指揮 金 洪才
独唱 志紀由理子 妻鳥 純子 牧川 修一 小川 裕二
※序曲「コリオラン」八短調 作品62……………ベートーヴェン
- 第16回 平成10年12月20日(日)
指揮 井崎正浩
独唱 佐々木典子 岩森 美里 井ノ上了吏 瀬戸口 浩
※序曲「レオノーレ」第3番 八長調 作品72a……………ベートーヴェン

新年への希望高らかに

「第九」熱唱

県民の会 県立劇場

年末恒例のベートーベン「第九」演奏会が十九日、熊本市大江の県立劇場で開かれ、一年を締めくくる歓喜の歌を歌い上げた。県民第九の会・県文化協会主催。演奏会は昭和五十七年、同劇場の完成を機に始ま

り、今年で十七回目。指揮者には、世界的なオルガン奏者で、ドイツ・シュパイヤー大聖堂音楽総監督のレオ・クレマー氏を招いた。オーケストラは熊本交響楽団の約百人。ソリストは、水野貴子（ソプラノ）、吉市出身、青山智恵子（メゾ・ソプラノ）、持木弘（テノール）、松本進（バリトン）の四氏。合唱団は、公募で集まった県内の高校生から八十歳代までの約三百三十人で、八月末から練習を積んできた。

ベートーベンの序曲「エグモント」を演奏した後、第九交響曲へ。第四楽章では、熊響にソリスト、合唱団が加わって「歓喜に寄す」を熱唱。新しい年への「喜びと希望」に満ちた力強い歌声をホールいっぱいに響かせ、クライマックスを盛り上げた。

300人以上が「歓喜の歌」を熱唱した県民第九の会の演奏会
＝19日午後、熊本市大江の県立劇場

決は、知事の行為を計画的
ウムが十九日、同市で開か
た。

